



〔概要〕

タガメは、水田や池などに棲息する日本最大の水生昆虫である。かつては普通に見られたが、タガメの棲息に適した水田の減少、農薬の大量使用によって、最近はその数が減少し絶滅が危惧され、環境省がまとめたレッドデータブックでは絶滅危惧・類になっている。

タガメは、カマのような前足でカエルや小魚を捕まえ、針のような口を突き刺して、肉を溶かして吸う摂餌生態を持つ。幼虫は脱皮を繰り返し、約40日ほどで成虫になる。

タガメの里親事業は、昨年度から行っている事業で、タガメの1齢幼虫を里親に貸し出し成虫までに育ててもらふことにより、希少種の生態や自然環境の大切さを学んでもらう事業である。また、返還してもらったタガメの背中にマーキングをして野生に放虫し、タガメの生態及び生息環境調査も行っている。

〔目的〕

今や少なくなったタガメを一般の方々に育ててもらふことで、いのちを育てる喜びや不思議さを体験してもらふとともに、地域の自然に目を向けてもらうこと。また、マーキングをして放虫したタガメの移動距離を調査するとともに、得られたデータを保全のための研究に役立てることを目的にしている。

〔方法〕

7月初旬に当館で飼育しているタガメ6個体から得た幼虫を、一般公募により選ばれた里親に各10個体貸与した。貸与に当たって里親講習会を開催し、飼育方法、タガメを取り巻く環境について講習を行った。里親には幼虫を家庭に持ち帰って、成虫に育ったら返還してもらふとともに里親発表会で観察記録を発表してもらった。返還してもらったタガメについては前述のとおり。

〔結果〕

一般公募で選ばれた7家族に幼虫79個体を貸与した(うち1家族に貸与した幼虫が、水草の栄養剤などのため全滅したので、9個体を追加貸与した)。このうち50個体が成虫となったが、希望する家族に成虫を差し上げたので、当館に返還されたのはオス、メス各19個体となった。なお、里親飼育発表会・返還式を当館レクチャールームで行った(9月7日)。

返還されたタガメの背中に油性マーカーで、オスG63-G81(青)、メスG81-G96(赤)とペイントし、さらに現地で採集したオスにG97とペイントして合計35個体を大東町のため池に放虫した(9月17日)。放虫後、タモ網を用いて棲息環境の調査をおこなった。

大東町内のため池、水田など4地点で、タガメ越冬状況調査のためタモ網を

用いて、生物の採集を試みたが、いずれの地点でもタガメは確認できなかった。

【実績及び事業活動の状況】

今年度は近隣の6市町村から7家族25名の参加があった。メディア数社の取材もあった。なお、助成期間(平成15年9月1日～平成16年8月31日)と整合しないが、活動の全体像を理解していただくために、助成決定以前の期間を含めて「タガメ里親事業」の活動内容を時系列で示す。

2003年7月 5日 ため池にて昨年放虫したタガメ(G1～G52)探索調査

- ” 7月 6日 昨年放虫地点付近の街灯に飛来するタガメ調査
- ” 7月 9日 タガメのペアリング開始
- ” 7月11日 タガメ産卵（孵化：7月18日）
- ” 7月21日 タガメの里親講習・飼い方教室-----1齢幼虫の貸与など
- ” 8月 2日 タガメの里親飼育相談・交流会-----意見交換、餌生物採集など
- ” 8月 5日 夜間街灯の灯火に飛来するタガメ調査
- ” 8月10日 タガメの繁殖個体(5月羽化個体G53～G62)を放虫
- ” 9月 7日 タガメ返還式・里親発表会
- ” 9月17日 タガメをマーキング(G63～G97)して放虫
- ” 12月14日 放虫したタガメの探索調査

なお、助成金(20万円)はタガメ育成の餌代、アクリル水槽及びタモ網の購入に充てた。

【閉じる】